君の口に溶けたい

三上　鯛

青山夏希が死んだと知ったのは、大学の図書館で黄ばんだ文庫本を繰っていたときだった。初夏の午後、窓から差し込む光が埃を浮かび上がらせ、どこか遠くでエアコンの低い唸りが聞こえていた。ポケットの中でめったにならない電話が震えた。普段なら放っておくのに、そのときはなぜか手に取ってしまった。その電話は母からだった。「夏希ちゃんが死んだ。事故だった」と母は言った。声は静かで、まるで古いレコードの針が落ちる瞬間みたいに、かすかに震えていた。数瞬の沈黙の後、「通夜があるから、帰ってきなさい」と続いた。僕は「うん」と答えた。母は通夜と葬式の日程を伝えて、電話を切った。ポケットに電話を戻して、また本に目を落とす。本のページは遅々として進まず、言葉が頭を滑って過ぎ去った。

夏希は友達だった。少なくとも、僕はそう思っていた。中学の夏、彼女が自転車の後ろで歌を口ずさんでいたことや、高校の冬、教室のストーブの前で二人の手を温めたのは、友達としての行為だった。言い訳がましく聞こえるけれど。

彼女の笑顔も、時折投げかけてくる視線も、特別な意味なんてない。そういうことにしていた。友達だから、それで十分だった。

新幹線に乗るために駅に向かう途中、初夏の空は妙に薄っぺらに見えた。晴れては見せているが、空色の絵の具を塗っただけのようだ。

夏希は空を描くのが上手かった。青だけじゃなく緑や黄色を使って空を描いていた。僕には見えない何かを見ていた。夏希がこの空を見たら、どう思うだろうか。

ホームの売店で缶コーヒーを買った。口を付けると、冷めきっていて金属の味がした。そのまま新幹線のごみ箱に捨てた。

何日も実家にいようとは思っていなかったから、荷物は軽かった。指定席をとってはいたが、座る気になれず、入り口に立ったままでいた。今身体を落ち着けたらもう二度と立ち上がれない気がした。友達が死んだだけなのに、殊勝なことだ。他人事のように思った。

窓の外ではすでにビル街は消え、郊外らしい建物が単調に流れていた。時折、鳥が一瞬だけ視界を横切った。

夏希のことを考えようとしたけど、頭の中は空白だった。彼女がどんな風に死んだのか、どんな顔だったのか、何も浮かばなかった。どうやって死んだかも分からないくせに、と笑ってしまった。彼女が死んだという事実と昔の思い出だけが僕の持つ全部だった。

地元に着いたとき、夕暮れの光が町を赤く染めてい

た。通夜の会場は、子供の頃に何度か通り過ぎた白い建物で、微かに線香の匂いが湿った空気に溶けていた。まだ幼い頃、夏希はこの建物をお城だと言っていた。黒い服は召使の証なのだと。その夏希がこの光景を見たらどう思うだろうか。

最上の中では、知らない大人たちが、黒い服で静かに動いていた。さめざめと泣く者もいれば、椅子に座ってじっと俯く者もいる。母に言われて焼香を済ませ、棺の前に立った。そこに夏希がいた。目を閉じ、唇に薄い化粧を施されて、静かに静止していた。肌は白く、水面に浮かぶ紙のようだった。彼女は僕が知っている夏希じゃなかった。でも、どこかで、彼女のままだとも思った。彼女の死に顔からすぐに目を逸らした。何も感じなくていい、と思った。

椅子に座って夏希の父の話を聞いた。彼は僕のことを覚えてくれたらしく、夏希の話を聞かせてくれた。仕事場から帰る途中の交通事故らしい。腹から下を車に押しつぶされて即死だったそうだ。だから棺は顔しか開けられなかったらしい。

目の前で、彼女の父は泣いた。嗚咽を漏らしながらハンカチで両目を覆った。まだ花嫁姿を見ていない、まだやってやりたいことも沢山あったのに、と涙をこぼした。

「夏希は優しくて、かわいくて、良い子だった」

そうですね、と相槌を打って背中を撫でることしかできなかった。

そういえば、小学校のころ、僕が転んだとき、夏希はこうやって慰めて、ポケットから絆創膏を出してくれた。こういう優しさを、目の前の男は知っているのだろうか。

斎場を二十時過ぎには出た。実家の部屋に戻り、少し埃っぽいベッドに横たわった。天井には、子供の頃に見つけた木目があった。端から端まで目で追った。夏希の声が聞こえた気がした。本当に声だったのか、それともただの風の音だったのか、わからなかった。たぶん、何でもないことだ。

その夜、夢を見た。

僕は夏希の部屋にいた。早朝の空のような淡い光が、室内を照らしていた。なぜか窓が開いていて、少し湿っぽい風が僕に触れた。微かに肌寒くて自分の腕を擦った。素肌の感触で驚いた。僕は服を着ていなかった。でもそのことには驚かなかった。夏希の部屋のカーペットを足の裏で感じた。毛羽立ったそれが足指の間に入り込んでくすぐったい。懐かしい。足元に目をやると、白い布が落ちていた。拾い上げると、ふわりと甘い匂いがした。夏希の匂いだ。布は女性用のブラウスだった。胸ポケットには、口紅が入っていた。ケースの端が欠けてい

て使いさしのようだった。
「持ってきて」
奥から声がした。思わず布を手放した。夏希だ。
「リップ、持ってきて。それお気に入りなの」
慌てて落としたブラウスからリップを取り、夏希に持っていく。夏希はゆったりとベッドに腰かけていた。黒いキャミソールが風で少し揺れていた。彼女の素肌はそんな布では隠しきれていない。夏希は足を揺らして気怠そうだ。ポニーテイルの束に入るには短すぎた髪が、首元で揺れている。
彼女は僕を見つめ、唇の端をゆっくり上げた。
「遅かったね、拓也」
甘く低く囁いた。その声は、まるで僕の心の隙間を縫うようだった。目は誘うように細まり、どこか意地悪く光っていた。友達だったはずの夏希が、こんな視線を向けるなんてありえない。そう思うのに、足は彼女へと引き寄せられていた。僕の手からリップを受け取ると慣れたように紅を引いた。白かった彼女の唇が色づくと同時に顔に血色が戻った。
「何、その目」
胡乱に夏希は僕を見た。ベッドの端で、細い指が僕のシャツの裾をそっと掴んだ。誘うように、命令するように。僕は振り払おうとした。それを察してか、彼女は少し悲しそうに唇を尖らせた。まるで僕の迷いを見透かすように。光が反射して唇が光る。
「やめていいの？　本当に？」
黙って首を振った。
気がつけば、彼女の肩を掴み、ベッドに押し倒していた。マットレスが小さく軋んだ。彼女の唇が、僕の唇に触れた。熱く、柔らかく、濡れていた。許されたくて僕は彼女の唇を少し舐めた。彼女は少しだけ唇を開けて、僕を受け入れた。彼女の舌が僕の歯列を舐めた。甘い吐息が口内に広がった。刹那、彼女の死に顔を思い出した。でも、もう、どうでもよかった。生きていた。今、確かに僕の中で彼女は生きているし、僕は彼女の中で生きていたかった。彼女の首筋に唇を這わせた。彼女は小さく喘ぎ、僕の髪を掴んで引き寄せた。あはは、と僕の耳元で笑った。覚えていて、と言うように。抱きしめた腕の中で、彼女は息をしていた。小さく、でも確かに。胸が上下するたび、俺の心臓も引きずられるように高鳴っていた。
彼女の指先が僕の腹を撫でた。背筋を何かが這う感覚がした。いつの間にかベッド脇にゴムが置いてあった。僕は息を詰め、彼女の手からそれを受け取った。銀色の包みを、わざとゆっくりと開ける。彼女は手持ち無沙汰になったのか、僕にしな垂れかかった。
「ねぇ、嬉しい？」
「何が？」

ゴムを指さして笑った。僕は頷いた。
「ならよかった……。案外、結構、拓也に幸せになってほしかったよ」
僕は彼女のキャミソールを引き上げ、汗で光る白い腹と胸を露わにした。彼女の腰を掴み、強く引き寄せた。彼女の足が僕の腰に絡んだ。彼女の目は、僕を捕らえて離さない、と彼女が囁いた。
はは、都合が良すぎる。

何かに落ちてしまった感覚がした。目が覚めたと気が付いた。つまりは、夢だった。僕は汗に濡れていた。舌先がじんじんと痛んだ。シーツは乱れ、息が荒く、胸が締め付けられるように痛んだ。部屋は暗く、窓の外で遠くの車の音が聞こえた。右手はシーツを握り潰し、震えていた。僕は目を閉じ、深く息を吐いた。身体の奥で心臓が激しく蠢いた。あれは夢だ。夢でなければならない。僕の青い青春を、純粋さを、友達だった夏希を、穢すなんて。夏希が死んだから動揺しただけだ。幻想にすぎない。夏希と僕は友達だ。なのに、体はまだ彼女の熱を覚えている。暖かかった。生々しかった。僕は枕に顔を埋め、押し殺した嗚咽を堪えた。彼女の微笑が、香りが、味が、頭の奥で消えなかった。幻覚なのに僕が作り出したまやかしで、夏希は死んだのに。
夏希のことを考えると、吐き気がする。でも、それ以上に、考えずにはいられない。
あの夢の感触が、皮膚の裏側に貼りついているみたいだった。指の節に、舌の裏に、足の間に。
彼女は死んだ。この世から永遠に存在が消えてしまった。
それなのに、僕はあの夜、夢の中で彼女に触れた。肌の温度を確かめて、音を聞いて、吐息に名前を呼ばれた。
それが現実じゃなかったことは分かってる。でも、あれは僕の頭の中で起きたことだ。
僕が見た。僕が望んだ。僕が、彼女を抱いた。
僕はいつだって、自分だけがまともなふりをしていた。夏希にだって、他人にだって、あいつは俺のことなんか何とも思ってない、って顔してた。視線を感じて、手が触れたときに呼吸が変わって、それでも平気なふりして笑ってた。
ずっと、欲しかった。
なのに、あんな形でしか手に入れられなかったことが、どうしようもなく悔しくて、惨めで、でも興奮して、嫌で、もう訳が分からなかった。
綺麗な思い出なんかにしてやらない。夏希は僕に汚された。可哀想に。僕なんかに汚されて、僕の元に堕ちてきた。妄想だろうと夏希は死んでしまった。死んだ奴に何の権利もない。永久に僕の物になった。

葬式の最中、夏希を天使みたいに語る連中の言葉が、耳に刺さるたびに吐きそうになる。
夏希は、そんな聖なる存在じゃなかった。もっとぐちゃぐちゃで、わがままで、温かくて、汗をかいて、嘘をついて、笑ってた。僕だけが知っている。黒い服を着た従者どもにはわからない。僕だけが知っていた。
忘れたくない。思い出すたびに心が擦り減る。あの夢の中の夏希が、現実の夏希の輪郭を削っていく。本物だったはずの声や表情が、少しずつ、柔らかに瓦解する。
いっそ、僕も連れて行ってほしかった。夏希の舌が絡まったあのときに僕の存在ごと溶かしてくれれば良かったのに。夏希に全部を許されたい。
彼女の唾液が僕の中に溶け込んで、残っている気がする。